

[植物園]

1989年 概要

理学部植物園は、大正12年（1923年）大学北部キャンパスの東側に開設され、長い間理学部植物学教室が管理してきたが、本研究施設が新設されて以来、教室と研究施設の教官で構成された運営委員会が植物園の運営に当たり、本研究施設が管理に当たってきた。

本植物園は、各種植物を生きた標本として集めた分類植物園としての特徴とともに、多様な自然立地を再現させるため各種モデル生態系を配置したいわゆる生態植物園としての特徴を持っている。そのため、小規模植物園ではあるが学術的評価は高く、その利用は植物分類・系統学分野から植物生態学・動物生態学分野まで、さらにはフィールドを必要とする他の学問分野にも広がっている。

現在、理学部植物園の敷地面積は、1.65ha であるが、園内には、日本産の各種植物のほかに、入手困難な琉球産、中国産、ヒマラヤ産、東南アジア産などの植物も集められ、木本植物約500種、草本植物とシダ植物を加えると約1,000種の植物が栽培・育成されている。また、ブナ科見本園など 13種類の見本園が作られている（附図 参照）。これらの多種類の生きた標本は、植物学教室を始めとする学内関係教室だけでなく、他大学の植物分類・系統学を中心とする教育・研究に広く利用され、必要によっては各種研究用生材料としても提供されている（附表 参照）。

一方、生態植物園として、竹林、砂丘、岩れき地（ロックガーデン）、洞穴、池、湿地などが配置され、また針葉樹試験区、カバノキ科試験区、下層植生試験区、昆虫試験区、低木実験区、シダ類実験区、微気象実験区などが用意されている（附図 参照）。これらの多様なモデル生態系及び試験・実験区は、本研究施設の生態学関係者を中心に、それらの中に永久コードラートを設置したり実験植物を植栽したりなどして研究に利用されている（附表 参照）。

植物園の敷地は創設時も十分な広さではなかったが、その後農学部への一部土地移管や、基礎物理学研究所、数理解析研究所などの建物新営により、敷地面積は減少している。一方、収集植物数は漸増し、個々の樹木の生長も著しいので、植物園は年々手狭まになってきている。現在、この問題の解決も含めた、植物園の将来計画の検討が進められている。